

# 藤並の森

Vol.65



写真提供／高知新聞社

## リレー随筆

## 豊穰のとき

山本一力

昭和29(1954)年から31年までの三年間、高知市内の洞ヶ島に暮らしていた。

叔父一家と祖父母、さらに叔父の弟が住む家に、居候した暮らしだった。

親父と協議離婚をしたあと、母はしばらく栄町の市営住宅で踏ん張っていた。が、女ひとりの稼ぎでこどもふたりを養うのは至難だったのだろう。

行き詰まつたおふくろは自分の母を頼り、洞ヶ島への居候を決めた。

母の両親と第一家三人、まだ独身だった末弟の合計六人が、布団を重ねるようにして暮らしていく家である。

六人で精一杯だった家に、さらに三人が押しかけたのだ。

迎えざるを得なかつた方は、さぞかし窮屈な思いを強いられたに違いない。

とはいゝ、戦後いまだ色濃い時代である。

お互い様だと我慢したのだと思う。栄町から移つたわたしと妹には、洞ヶ島の家

は別世界に思えた。

あの時代の市営住宅は、家の中に流し場もトイレもなかつた。六畳一間が三軒連なつた長屋の外に、雨ざらしの共同流し場が。

雨降りでは傘をさして水仕事をした。そんな暮らしから、流し場もトイレも備わつた家

に移つたのだ。居候の身分も忘れて、こどもは便利な暮らしを満喫した。

近所には薫的神社と小津神社の二社があつた。縁日の夜は母から五円の小遣いをもらい、一歳年下のツギオ(従兄弟)、ツギオと同じ年の妹の三人で夜店に出かけた。洞ヶ島に暮らしていたとき、江ノ口小学校に入学した。学校から帰つたあとは、天気さえよければ向かう先が二カ所あつた。ひとつは高知城と、お城下のすべり山。もうひとつは市役所近くの市民図書館だ。

どちらも洞ヶ島から歩きで行けた。

高知城では石垣をよじ登り、おんちゃんに見つかったらごつごつ叱られた。

市民図書館には「知らないもの」がぎっしりと詰まつていた。

図鑑で初めて「世界の七不思議」を見たときは、あたまのなかでその地を旅した。

アンデルセンの童話で、いくたびヨーロッパの田舎町を歩く自分を想像したことか。

還暦を過ぎてすでに六年のいま、しみじみ思い返すことがある。

洞ヶ島から高知城までの一带に抱かれて育つた、多感だつたこども時代。豊かな時間を過ごせたればこそ、この歳まで息災に過ごすことができたのだ……と。その高知城下にある高知県立文学館で文学展を開催いただけるとは、喜び、これに勝るものなし。

(作家)

展覽會  
紹介  
Exhibition

# 山本一力の世界展

「明日は味方だ」

「ものかき」

山本一力さんの魅力

展示構成

## 第一部 山本一力・人間の魅力

作品のテーマとなつてゐる心意気、粹、義理・人情、家族愛など、これらは一力さんご自身が大切にされていることであり、江戸の下町・深川などを舞台として「商人の知恵、職人の技、武家の誇り」などを描いた物語は、現代に生きる私たちに働くことの楽しさや意味など思い起こさせてくれます。

今年、66歳を迎える山本一力さんは、1962（昭和37）年5月、14歳の時に、生まれ育った故郷・高知から上京していきます。以後、東京・深川を拠点に活動し、50余年の歳月が過ぎました。

今日「時代小説」における中心的な作家として評価されている山本一力さん。

一力さんの作品の魅力は、少年時代からの豊富な読書量と貴重な人生経験を通して培われた人間力であり、小説に向き合う際の強い意思と姿勢にその源があると考えられます。

また、一力さんは、21世紀の江戸（東京）に暮らしながらも、故郷高知を心にとめ、作品やマスコミなどを通じて、常にあたたかい応援メッセージを発信し続けてくださつており、気さくで人情味豊かな人柄は、観光特使や高知PRのためのプレゼンターとしても欠かせない存在です。

ここでは、文芸評論家や友人等からのメッセージを交えながら、一力さんの人としての魅力を写真パネル等でご紹介します。

### 一、誕生から上京まで

（高知で過ごした少年時代）

### 二、中学校卒業から高校時代

### 三、多彩な職業や本との出会い

### 四、作家・山本一力の誕生

- ①オール読物新人賞受賞作『蒼龍』
- ②初めて土佐を題材にした「長い串」
- ③直木賞受賞作『あかね空』

一力さんは「自身を「ものかき」とおつしやつており、その通りの活動を続けておられます。しかし、その作品の背景にある一力さんの人生の歩みや、作品の底流に流れる深い思いや、メッセージなどに私たちが触れる機会は、案外限られているかもしれません。

展覧会では、人間・山本一力の魅力や作品の魅力や一力さんを支える家族の力など「ものかき」山本一力の世界をご紹介いたします。

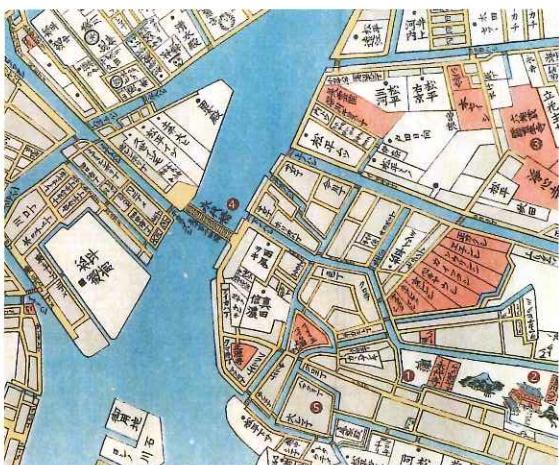
## 第二部 山本一力・作品の魅力

ここでは、山本一力さんの作品の魅力をご紹介します。

### 一、土佐を舞台にした作品

一力さんと土佐。一力さんの土佐への眼差しは温かく、人びとをつつみこみます。

土佐を舞台とした小説には『牡丹酒』『いすゞ鳴る』『くじら組』『ジョン・マン』『朝の霧』などがありますが、今回は『くじら組』、『ジョン・マン』、『牡丹酒』を中心にご紹介し



© 人文社 「天保改正御江戸大絵図」より永代橋周辺

### 第三部 山本一力・家族力とその未来

苦しい時、悲しい時、いつも支えてくれたのは、家族でした。

一力さんのパワーの源である、山本家の魅歩み続ける一力さんのこれからを見つめます。力を紹介します。

(学芸課長／津田加須子)



#### ※主な出展資料

校正原稿、「江戸名所花曆」文政10年(1813)

「東都歲事記」天保9年(1838)、

「本所深川絵図」文久2年(1862)、

「江戸名所図絵」天保7年(1836)、

オール讀物新人賞の賞状及び賞品  
直木賞賞品の時計、目録

池波正太郎からもらった「梶の置物」  
モンブランの万年筆」他

会 覧 展

紹 介

# 山本一力の世界展

## 明日は味方だ!

平成26年  
4月26日(土)

▼  
6月22日(日)  
企画展示室  
観覧料500円

### ■展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

会期中  
毎週土曜日  
午後1時半～  
(約30分程度)

参加費:要当日観覧券  
申込:不要。

直接会場にお越しください。

### ■映画上映会

・日 時: 5月25日(日)、6月15日(日)  
各日とも午後2時～4時

・場 所: 高知県立文学館 1階ホール  
・内 容: 「あかね空」  
・定 員: 各日とも先着50名 (電話又は文学館受付にてお申し込みください。)  
・参加費: 参加には当日観覧券が必要です。



### ■山本一力さんの作品朗読と昼食を楽しむ会「山本一力さんが愛した土佐」

・日 時: 6月2日(月) 12時～  
・場 所: コックドール(レストラン/高知市帯屋町1-1-13)  
・定 員: 先着30名 (電話又は文学館受付にてお申し込みください。)  
・参加費: 2,000円を予定

他にも朗読の会(4月19日(土) プレ企画として開催)など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

# 文学館の常設展が変わりました！

来館のたびに新しい発見があると好評の「変わる常設展示」。今年度は4人の作家の入れ替えを予定しています。



## 展示公開中！

展示は4月下旬を予定！

見どころ…生前唯一の歌集『地懐』、  
中村中学時代の自筆ノート

### ●「現代の文学」コーナー 橋田東声を増設

短歌雑誌「霸王樹」を創刊、主宰。打ち続く肉親の死、妻との離別という不幸に見舞われながらも閑雅で清澄な名歌の数々を残した歌人・橋田東声をご紹介します。

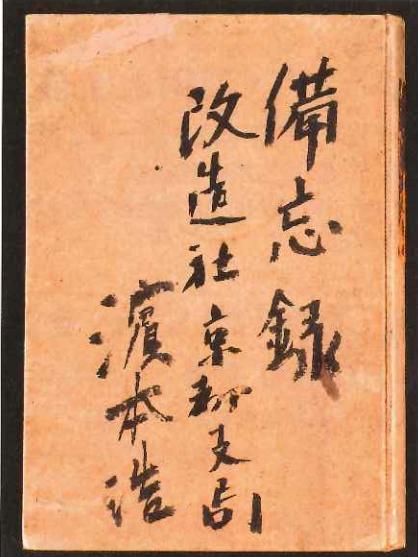
- 「現代の文学」コーナー  
大原富枝を安岡章太郎へ入れ替え
- 見どころ…直筆原稿「大世紀末サーカス」、  
「三田文学」41巻2号  
(「ガラスの靴」初出誌)

展示は5月下旬を予定！

見どころ…左手草稿「芥川龍之介の思い出」、  
東大時代のノート  
(ブランデン教授講義録)

### ●「現代の文学」コーナー タカクラ・テルを上林暁へ入れ替え

「聖ヨハネ病院にて」ほか病妻もので作家的地位を不動のものとし、自身の病気とも闘いながら文学への執念を貫いた私小説作家・上林暁をご紹介します。



▲浜本浩 改進社京都支局時代の備忘録

展示は4月下旬を予定！

### ●「反骨の大衆文学」コーナー

馬場孤蝶を浜本浩へ入れ替え

「改造」記者時代には志賀直哉、谷崎潤一郎らの担当としてその人柄を愛され、のちに作家へと転身。『浅草の灯』などで知られる大衆文芸作家・浜本浩をご紹介します。

見どころ…来賓楽がき帖

改進社京都支局時代の備忘録

## ◆展覧会・年間ラインナップ

元吉 喜志男

展覧会の年間ラインナップは、館として毎年議論しながら組み立てていく大切なテーマです。

文学館の指定管理者として「ゆかりの作家・作品の顕彰」と土佐文学の紹介」「様々な年齢層への知的好奇心の喚起」「観覧者数の増加と新たなファンの開拓」など、取り組むべき役割は数多くあります。

それらの命題を胸に、それぞれの担当者が挑戦心を持つて携わっている展覧会。

これぞ文学館らしい企画と望んだものの、意外に観覧者数は伸びなかつたもの。お堅いイメージから脱皮してという声を背景に、幅広い層に人気を博し、観覧者の記録を大幅に塗り替えたもの。展示内容に感動した旨のお礼のメッセージや手紙などを沢山いただいたもの等々。作家ご自身やゆかりの人たちとの心に残る出会いなどともあいまって、一つ一つの展覧会への想い出は尽きません。

「見せる文学館」から「魅せる文学館」へのヒントは、お客様アンケートのデータや日々の日報の数値の中などにも隠されています。

展覧会ごとの観覧者の性別、年齢層、来館のキッカケ、交通手段、来館回数、住所など。展示内容・接客・快適性への満足度。また、季節・曜日・天候、関連イベントとの相関関係などを重ね合わせて観していくと、お客様が求めている様々な表情が浮かんできます。

それらも踏まえ、今の時代の中で「文学館」という存在が何を求めるか将来へ向けてどう進化していくか…?

平成26年度の展覧会は、そんな思いも込めながら、今号の当館報でも紹介している年間ラインナップとしました。ご興味のある展覧会に是非お越し下さい。

## 館長室から

# ◆常設展企画コーナー & 宮尾文学の世界室の展示も変わります！

常設展企画コーナーにて、

平成26年1月に相次いで亡くなられた

作家の坂東真砂子さんと

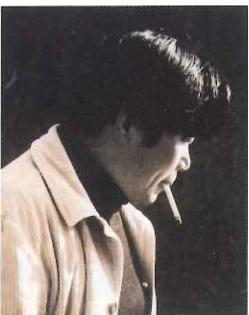
詩人の片岡文雄さんの追悼展を

開催いたします。

潮社で第16回現代詩人賞などを受賞しており、日本現代詩人会・日本文芸家協会各会員、日本現代詩歌文学館評議員など務められていました。また、長年高校の教諭として後進の育成にも尽力され、82歳の生涯を終えられました。片岡さんが取り組んだ方言詩などの魅力をご紹介します。



坂東真砂子さん



片岡文雄さん

■期間 平成26年4月1日(火)～平成27年3月下旬  
■休館日 年末年始他  
■場所 高知県立文学館2階 常設展企画コーナー



## ●宮尾登美子の『クレオパトラ』展開催！

■期間 平成26年3月1日(土)～平成27年3月下旬  
■休館日 年末年始他  
■場所 高知県立文学館2階 宮尾文学の世界

日本の伝統文化や歴史の中の女性の生き方をテーマに、数々の名作を書かれてきた宮尾登美子さんですが、歴史小説の中で、唯一海外の女性を主人公に描いた作品に『クレオパトラ』があります。

平成26年度は、宮尾さんによって、現代に蘇った絢爛たるエジプトの歴史絵巻を宮尾さん寄贈の資料を通してご紹介します。

坂東真砂子さんは、土俗的な作品や怪奇小説から始まり、「死」と「愛」と「性」を主題とした作品が特徴の高知出身の作家です。大学卒業後、イタリアへ留学。帰国後、現代社会に潜む不可解さ、怪奇性、神秘性などに興味をもち、それらに光をあてた作品を書かれました。児童文学や、直木賞受賞の『山姫』、柴田練三郎賞受賞の『曼荼羅道』、『梶首の島』、映画化された『死國』『狗神』や『桃色浄土』『旅涯ての地』などジャンルを超えて執筆されています。

また、坂東さんは、高知の応援団でもありました。高知新聞に連載された『やつちやれ、やつちやれ！独立・土佐黒潮共和国』では、独自の高知県論を紹介。高知応援作品の火付け役ともなりました。

本展では、55歳という若さでこの世を去られた坂東真砂子さんの作品世界をご紹介します。

そして、片岡文雄さんは、現代詩の分野で活躍された方です。詩人の嶋岡景さんを兄と慕い、高知を拠点に活動。高知を代表する現代詩人でした。1976(昭和51)年『帰郷手帖』で第9回小熊秀雄賞、1998(平成10)年に『流れる家』(思

## 『土佐文学さんぽ』が本になりました！

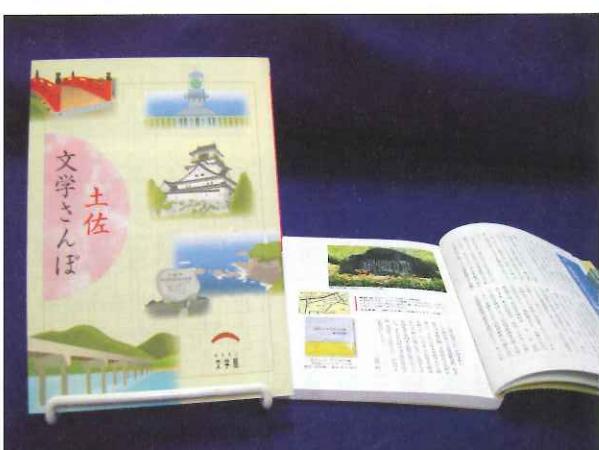
季刊「藤並の森」では、創刊以来「土佐文学さんぽ」のコーナーで、高知にまつわる作品や文学者たちのゆかりの地を訪ね、作品の背景となつたエピソードや作家のルーツ・精神的バックボーンなどを紹介しています。

このたび、このシリーズも60回を越えたことから『土佐文学さんぽ』と題して、一冊の単行本として編集・発刊することとしました。

執筆者は、高知の文学に造詣の深い、故・岡林清水氏、故・国則三雄志氏、そして、現在執筆中の猪野睦氏の三氏です。

高知ゆかりの文学作品やその作品の背景にある風土、その中で育まれた作家の思いなどに思いを馳せ、ふるさとの文学に少しでも関心を持つていただく上での貴重な一冊となると思われます。

当館ミュージアムショップで販売(500円)していますので、興味のある方は、来館の際、是非、お手にとつてご覧下さい。



## 寅彦グッズも出来ました♪



- ◆寅彦コーヒー(ドリップ)  
1袋 100円(税込)
- ◆寅彦コーヒーカップ  
一客 1,400円(税込)

## トピックス

## 岡豊城の長宗我部元親 — 宮地佐一郎の「放鶴絵図」「鬪鶴絵図」— 猪野 瞳

岡豊城へ登ると、高知東部平野が一望の眼下に見えた。標高100メートル近い頂上の長宗我部の中世城跡は、四国の北山の尾根がなだれようとしている。

止つたところに突きだした塊のような山上にあった。この山頂からは広がる田園がみえ、はるか右手には太平洋が光つて見えた。城のすぐ下を国分川がかこむように流れ、戦国時代の城としては最適な場所に思えた。おそらく当時、城からの眺めは未開発の原野と国分川、彼方の物部川が勝手に流れ湿地をつくりだしていたろう。

そこへ秋おそらく鶴が飛来ってきて三月には帰っていく。羽毛純白の丹頂鶴が飛び交う。大津から廿枝あたりは、戦後もしばらく大湿地が自然のまま残っていた。今ではそこへバイパスがつき湿地も開発されていったが、長宗我部時代は、それに浦戸湾から大津あたりへの込み潮も混じり、その

◆岡豊城跡二ノ段より東を望む。右手奥が太平洋。



原野と湿地は城主の野望を拓げる光景でもあつたろう。

急傾斜をもつ城の東側に立つと、下から木の合間に吹き上つてくる強風とざわめきに不意に敵の襲来を思わずひやりとするものがあつた。

ここから長宗我部元親は兵をくりだし土佐を統一、四国制覇あと秀吉の軍門に下り、豊後戸次川へ行かされ長男信親を失い、あと勢を失つていく。このあと岡豊城を捨て大高坂、いまの高知城へ城を移すが洪水、高潮、疾患にさらされ放棄、浦戸へ城を移す。秀吉の命で朝鮮出兵、あと家督をめぐる家騒動で衰退、戦国武将といわれた元親も61歳で世を去つていく。

この晩年の元親を歴史小説にかきこんだのが宮地佐一郎の「放鶴絵図」「鬪鶴絵図」「落武者」だつた。それぞれ同人誌「詩と眞実」にかき、このなかの「鬪鶴絵図」は昭和31年上半期直木賞候補となつた。

「放鶴絵図」は秋飛来し春帰つて行く鶴をとらえ元親は数十羽飼い始める。育て一帯に放そうという夢をもつが、秀吉の軍門に降り残兵をひきいて帰る途中、おのれの半生をふりかえり鶴を放つ決意をする。夢放棄である。

「闘鶴絵図」は軍鶴飼いに熱中し、その相手を喰いつぶしていく強い軍鶴に己を見、夢を託していくが、その育てあげた最愛の軍鶴が元親めがけて飛びかかる。鋭い嘴と蹴爪でやられ腕が血をふく。たわけめと脇差で切り払う。裏切られていく元親の半生の挫折と孤独をほりあげた。

この岡豊城登り口には県立歴史民俗資料館があつて長宗我部元親盛衰記をじっくり見ることができる。

(詩人)

## 資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

『とんちゃん新聞』 とんちゃん新聞80号記念縮刷版

竹内直人編 土佐出版社刊  
1989年6月 212頁 A4判  
嶋岡 晨氏署名入り 嶋岡 晨氏寄贈



▼古賀直美・寺田寅彦書簡他 ▼食野雅子・マジック・ツリー・ハウス35 アレクサンダー・大王の馬 メアリ・ボーブ・オズボーン原作 食野雅子訳 KADOKAWA刊 ▼森 武司・句集華森武司著 球俳句会刊他

▼蝶発行所・蝶 200号記念 蝶合同句集第3集 畑山弘他編 蝶俳句会刊 ▼林嗣夫・ベトナム独立・自由鎮魂詩集175篇 鈴木比佐雄他編 コールサツク社刊 ▼山本清水「明日の友」第207号 山本清水「あひるは」収載 婦人之友社編刊 ▼横田晴光・植物一日一題 牧野富太郎著 博品社刊他

▼野村波津「エッセイ集 水色の空 野村波津著刊

▼高知新聞総合印刷「歌集 水陽炎 実万恵子著刊」  
▼貴司山治ne+資料館・「ゴー・ストップ」初版発禁版翻刻 改訂版 貴司山治著 伊藤純編 貴司山治ne+資料館刊他 ▼リープル・学校の記憶と再生かつて高知県には709の小中学校があつた 高知ミモザの会編刊 ▼蠶の会・句集 夜雨寒蛩 村上炳魚著 林佳編 蠶の会刊 ▼伊丹公子・伊丹公子全詩集 伊丹公子著 沖積舎刊

▼「とんちゃん新聞」は、1954(昭和29)年の創業以来55年間、高知市の街角で「とんちゃん」の愛称で親しまれた居酒屋「成吉思汗」が発行していた新聞で、1966(昭和41)年の創刊から33年間、計100号まで刊行されました。本書『とんちゃん』は、第80号を節目に一冊にまとめられた縮刷版で、巻頭には小冊子「屋台の歌」(開業10年目に刊行)も収録されています。

「とんちゃん新聞」の主たる執筆陣は、同店に足しげく通っていた詩人、作家、芸術家たち。本書を御寄贈くださった詩人・作家の嶋岡晨さんも、高知にいた頃は「とんちゃん」に通つた一人。「二ラやラレバやらの匂いのムンムンする精力貯蔵庫みたいなお店」を懐かしみ、近況を伝える「東京便り」(第11号)、「望郷戯歌」と題す短歌(第52号)、創刊第80号記念特別号に寄せた「牛後の記」等、

第80号記念特別号に寄せた「牛後の記」等、新聞に寄稿しています。表紙を開いた見返しには、温かみのあるしっかりとしたベン書で「謹んでこのわが愛蔵の書をふるさと土佐の県立文学館によろこびをもつて贈ります。」と記されています。(学芸課/小松路代)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

4月13日まで好評開催中！

# 黒井健 絵本原画の世界展・物語との出会い、

## 黒井健先生の講演会と サイン会を開催！



▲講演会の様子(右側が黒井先生)

まだ春浅い2月15日(土)、平成25年度高知県立文学館企画展「画業40年記念黒井健絵本原画の世界展・物語との出会い」開催に伴い、文学館1階ホールにて、黒井健先生の講演会とサイン会が行われました。

講演会は15日13時30分から、当館館長・元吉喜志男との対談形式でスタート。会場は100名を越えるお客様がお越しください、満員の大盛況となりました。高知市内の方はもちろん、県内各地から沢山の方々のお申し込みを頂いて、改

めて黒井先生の根強い人気を実感いたしました。

講演会は、黒井先生の子ども時代や学生時代の話から始まりました。黒井先生は、子どもの頃から手先が器用で、工作が得意だったので、高校生くらいまでは建築家になりたかったそうです。大学卒業後出版社に勤めますが、「一日中、好きな絵を描いてみたい」と、イラストレーターとして独立されました。独特の画法や色への思いなど、ただ絵を見るだけでは知り得なかつた黒井先生の作品の魅力を再認識させられるお話をしてくださいました。その中で特に印象深かったのは、新美南吉の「ごんぎつね」に出会うお話を。『「ごんぎつねは、かわいく描くことをしなかつた作品なんです。』物語の中で作者が描こうとしているものを絵に込めて描く、

当時の状況も交えながら描かれた「ごんぎつね」の絵。なぜ、ごんの瞳が、物語を暗示するように哀しみを湛えているのか、そこしだけわかつたような気がしました。

宮沢賢治作品との出会い、「ケンタウル祭の夜」

「ハナミズキのみち」に込めた祈りの気持ち、作品ごとのエピソードが、先生ご自身の物語に向かい合う真摯なお心を映しているようでした。また雪国・新潟のご出身ならではの雪の描き方のお話で、描き方一つで雪の質感を描く描き方は南国高知育ちの私達には非常に新鮮なお話でした。黒井先生と親交のあった郷土のまんが家、やなせたかし先生との想い出を語られる場面もありました。時折、ユーモアをまじえてお話し下さると、会場から笑い声があがることもあり、始終和やかな雰囲気でした。講演会終盤の質問タイムにある女の子から「私は猫が好きなので、ころわんのほかにこころにゃんを描



『ごんぎつね』偕成社  
©KEN OFFICE, 1986

いて欲しい」というリクエストがあり、「僕もどちらか」というと猫派なんですか」というお返事をされ、驚きの声もあがりました。(ころわんシリーズを描いているから黒井先生は犬派と思つていらした方が多かつたようです)黒井先生の穏やかな口調を通して語られる作品への想い、柔軟なお人柄や佇まい、会場全体が優しい雰囲気に包まれた講演会となりました。

講演会の後は、サイン会を行いました。黒井先生はサインの他にそれぞれイラストを添えてくださいました。図録や絵本にサインをしていただいたお客様、一人ひとりが感嘆の声を漏らしながら、先生の手元を見つめ、顔をほころばせていました。長年のファンの方から小さなお子様まで、幅広い年代の方が、先生に会えて嬉しいと喜んでおられました。サイン会は翌日、16日にも開催されました。ちょうど、関東甲信越が荒天の時期でしたが、講演会を心待ちにされていました。黒井先生のおかげで文学館でも嬉しいお客様の思いが通じたおかげなのでしょうか。全日程予定通りに終了することができました。

当日は寒いながらも、時折太陽の光が差し、

文学館の前の紅白梅も満開で春の香りが漂っていました。黒井先生のおかげで文学館でも笑顔の花がたくさん咲き、多くのお客様に喜んでいただけた素晴らしい週末となりました。

(学芸課／谷岡真衣)

## 人事異動

【転入】

新所属  
文学館  
副館長兼  
総務事業課長

旧所属  
県民文化ホール  
副館長兼業務課長

【転出】

新所属  
高知県庁  
計画推進課チーフ  
(地域支援担当)

旧所属  
文学館  
事業課長

**[新採]**

文学館総務事業課

檜垣  
佳甫

埋蔵文化財センター

文学館  
事業課

公文  
利佳

## ●平成26年度(上半期)文学力レッジ 受講生募集! ●

高知県立文学館では、高知ゆかりの作家や作品について、じっくり学べる文学力レッジを開催しています。

常設展示とリンクする文学力レッジによって、さまざまな角度で高知の文学をお楽しみいただければと思います。

- 日程: 第1回 4/26(土)「土佐文学さんぽ」講師: 猪野睦  
第2回 5/24(土)「山本一力の世界」講師: 津田加須子  
第3回 7/26(土)「坂東真砂子さんとの思い出」講師: 公文豪  
第4回 8/23(土)「片岡文雄の詩について」講師: 小松弘愛  
第5回 9/27(土)「中脇初枝の文学」講師: 永橋禎子

時間: 各回とも午後2時~3時半まで

場所: 高知県立文学館1階ホール 定員: 100名

※事前に専用の申込用紙か電話または文学館受付でお申込みください。

また、内容など詳細はお気軽にお問い合わせください。



4月  
~  
6月

## 山本一力の世界展 ~明日は味方だ~

4月26日(土)~6月22日(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

展覧会の紹介をしています!

詳細はこの館報の表紙・2ページ・3ページをご覧ください。

7月  
~  
9月メニーメニーミッフィープレミアム  
~絵本の楽しいこといっぱい~

7月12日(土)~9月7日(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

1955年にオランダで誕生して以来、世界中で愛されているミッフィー。本展ではミッフィーの生みの親で絵本作家、グラフィックデザイナーのディック・ブルーナさんが描くイラストや絵本の制作のひみつ、これまでの歴史などをパネルや立体資料で分かりやすくご紹介します。ミッフィーの可愛い絵本の世界をお楽しみください。



Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv, 1953-2014 www.miffy.com

9月  
~  
11月

## 中脇初枝展 ~ちゃあちゃんの里帰り~

9月19日(金)~11月3日(月・祝) 場所:企画展示室 観覧料:500円

中脇初枝さんは、県立中村高等学校在学中、『魚のように』で坊ちゃん文学賞を受賞、17歳で作家デビューしました。『祈祷師の娘』『きみはいい子』など、温かい筆致で描かれた作品世界は多くの人々に愛されています。本展覧会では、純文学、昔話、児童文学と、さまざまなジャンルで展開されている中脇作品世界の魅力をご紹介します。



撮影/根津千尋

12月  
~  
平成27年2月

## 万葉集・こころの旅展 ~大和路を愛した入江泰吉の作品とともに~

12月5日(金)~平成27年2月8日(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

わが国最古の『万葉集』の歌には、いにしえの人々の喜怒哀楽のさまがまっすぐに表現され、私たちの心に根付く日本の原風景を呼び起こしてくれます。大和路特有の美や情趣をライフワークとして撮り続けた入江泰吉氏の写真を通して、大和路に漂う余情や空気感に思いを馳せていただきます。



陽春大仏殿

(※12月27日~1月1日は年末年始のため休館となります。)

平成27年2月  
~  
4月

## 北欧文学との出会い展

平成27年2月21日(土)~4月19日(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円

サンタやトロルなど独特の伝承や神話。人魚姫、ムーミン、ピッピなど日本になじみ深い児童文学。社会問題を描き出す北欧ミステリー。これら豊かな本との関わりを支える図書館。世界の注目を集め北欧の暮らしから「本当の豊かさとは何か」を考えてみませんか?自然と共に生活してきた北欧の暮らしと文学についてご紹介します。



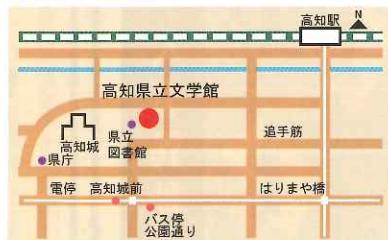
写真提供:フィンランド政府観光局

## 利用案内

- 開館時間 午前9時~午後5時 (入館は、午後4時半まで)  
 休館日 年末年始(12月27日~1月1日)を除き、無休。  
 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。  
 観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。  
 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、  
 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、  
 精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者  
 健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。  
 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。  
 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、  
 茶室「慶雲庵」  
 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp  
<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

## 交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)  
 「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立  
文学館

〒780-0850  
 高知市丸ノ内1丁目1-20  
 電話 088-822-0231  
 FAX 088-871-7857